

脳神経外科レジデントマニュアル

若林 俊彦【監修】
夏目 敦至, 泉 孝嗣【編】

評者

寶金 清博
北海道大学教授・脳神経外科学

名古屋大学脳神経外科講座とその関係者の総力を挙げた力作である。出版の医学書院の力の入れようも半端なものではなかったことが、若林教授（名大大学院教授）の「序」からもよく理解できる。

現代の脳神経外科学が、学問領域として独立した時期を Harvey Cushing 先生のハーバード大学教授就任のときと仮定しても、もう既に 100 年以上が経過している。この間、先人たちの努力による膨大な知識と経験の蓄積がある。その情報量は、既に big data の領域に達している。

これを系統立った成書として記載することは容易ではない。精度を追求すれば、百科事典的なものにならざるを得ない。しかし、新たに脳神経外科を学ぶレジデントや学生には、限られた時間しか与えられていない。彼らは実に勤勉であり、よく働く。しかし、最近の医療現場は、知識が最も必要なレジデントの先生方から時間的余裕を奪いつつある。そして、彼らレジデントが、実際の患者診療の現場では患者さんに最も近い「主役」であることは、看過できない事実である。つまり、最も知識と経験を必要とするべき「主役」たちには、膨張し続ける「脳神経外

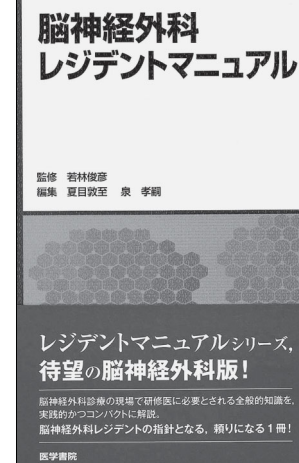
科学」を学ぶ時間も手引きもないことは、患者さんにとっても深刻な事態である。そして、この憂慮すべき状況は、脳神経外科学に限らないことである。

いわゆる「マニュアル」本を依頼された側は、膨大な学問体系の中から実臨床に必要な知識をいかに大胆に、かつ細心にダウンサイズするかに苦悩する。そして当然のことながら、学問領域の膨張を考えると、いかなる博覧強記の人間といえども、単独で成し遂げられないことは明らかである。結果、ある知識集団による分担執筆となる。

「臨床マニュアル」は、持ち運べる分量であり文庫程度の「量的な制限」の中で、①知識が実臨床の多様性と即時性の観点から真に実用的であること、②全体の整合性が取れていることという、実に高いハードルが設定されることになる。この2つは、一般には両立が難しいことで、そこに「マニュアル」作りの難しさがある。まして、スマートフォンでインターネットを使えば、あっという間に最低限の知識にたどり着く時代である。正直、「マニュアル本」を引き受けるのは相当な勇気と実力が必要な時代である。

本書は、上記の全ての点を見事に克服している。膨大な学問に発展した脳神経外科臨床に必要な十分な知識や技術が実に見事に整理され、ベッドサイドで力を発揮できるマニュアルとなっている。第1章の診察の手順から第9章の緩和医療、付録のデータファイルまで、現在の脳神経外科臨床を学ぶレジデントには、力強い味方となってくれる。臨床の主役、患者さんに一番近いレジデントの力になることは、言い換えれば、「患者さん」の力強い味方である。

本書が、ひとりでも多くのレジデントの学びをサポートすることで、患者さんの幸せに貢献することを期待するものである。



B6 変型・頁 384

2016 年 5 月

定価：本体 4,800 円＋税

[ISBN978-4-260-02533-1]

医学書院刊